

基盤教育院、初年次教育の今後の展望

基盤教育院 基盤教育デパートメントチエア
室岡 一郎

はじめに

私は初年次教育の研究者ではない。その展望を語る資格があるのかどうか、いささか心配である。一方で、2001年度より現在に至るまで、主に一年生を対象とする「文章表現 I」の授業を担当してきた。一般的にみても文章指導は代表的な初年次教育の一つであり、「文章表現 I」は2003年度より全学必修科目（コア科目）となっている。また、2007年度に誕生した基盤教育院の一員となってからは、微力ながらその運営にも携わってきた。そのようなかたちで初年次教育と関わってきた一人の教員として、基盤教育院や初年次教育のこれからを考えてみることはできるだろうか。

基盤教育院でおこなわれている初年次教育の取り組みの現状や課題については、これまでの記事において個々に詳しく述べられているはずであるから、本稿では桜美林大学の初年次教育の全体像とその将来をとらえてみることにしよう。

大学教育に携わる人々にとって、初年次教育は周知の概念であるが、一般的にみると、その意味や具体的な内容は必ずしも明確に認識されてはいないかもしれない。また、日本では1990年代以降に注目されはじめ、急速に広まったといわれる初年次教育であるが、各大学が独自の初年次教育に取り組んできており、その内容は多様である。多岐にわたる初年次教育とそれに隣接する教育活動は多くの論者によって整理、分類、分析されてきたとはいえ、大学教育の現場にいる私にとっても、その印象はいささか混沌としているといわざるをえない。初年次教育の事例、それをめぐる言説に触れていると、まるで色とりどりの糸が複雑に絡んだ毛糸玉を見るようである。まずはそれを解きほぐすことから始めたい。

なぜ初年次教育が求められるのか、その原点

なぜ初年次教育が注目されるようになったのか、どこにその必要性があったのか。この原点をおさえておくことは、桜美林大学の初年次教育の未来を考えるうえでも重要だ。

初年次教育の原型は、すでに1800年代末期から1900年代初頭にかけてのアメリカの大学においてみられ、「大学で学ぶ姿勢」や「ノートのとりかた」などのオリエンテーショ

ンが実施され、単位認定もおこなわれていたという（山田、2005）。そのような内容のオリエンテーションに単位を与えることへの疑問もあって、やがてその動きは衰退したが、1970年代後半から1980年代前半にかけて再び注目されることになる。「高校から大学への移行という青年期にとっての重要な転換期を支援する教育」と定義され、アメリカの多くの大学で導入されたことが、現在の初年次教育（アメリカでは多くの場合、「First Year Experience」と表現される）の始まりだといわれている（山田、2012）。

アメリカの大学で初年次教育が再び注目されるようになった背景には、一つに、18歳人口の減少によって学生数を確保することが困難になった、という経営上の問題が存在する。それを乗り越えるため、大学は多種多様な学生を取りこむことになり、その結果、学力が高く、基礎的な学習能力を身につけ、探究心にあふれた「伝統的な学生像」は崩れ去ったといわれている。非伝統的な学生を大学教育（あるいは大学生活）に適応させるため、ふたたび、初年次教育の必要性が唱えられるようになったのである。

大学生がひとにぎりの知的エリートであった時代は遠い昔のことであるが、その後、よくもわるくも「大学の大量化」が加速度的に進んだとき、初年次教育の必要性が叫ばれるようになった。その事情は日本においても同様である。日本の大学がいわゆる「全入時代」を迎えるといわれて久しいが、「大学の大量化」は極限にまで進もうとしている。その意味において、まさにいまこそ、初年次教育は必要不可欠な教育活動であるといえる。

初年次教育につきまとう負のイメージ

初年次教育の原点をふりかえると、どうしても負のイメージかつきまとう。乱暴ないいかたをすれば、少子化を背景として、経営に困った大学が学生を手当たり次第にかき集めた結果、本来ならば大学で教える必要のないことまで教えざるをえなくなった、それが初年次教育だということになるからだ。

もう一つおさえておきたいことは、初年次教育とともに語られることも多い「リメディアル教育」の問題である。リメディアル教育とは、端的にいうと、高校までの学習内容の補習である。本来、高校までに習得すべきこと、習得しているはずのことを大学で学びなおさせ、身につけさせることだ。大学でリメディアル教育をおこなうということは、本来の大学教育の前提となる基礎学力、知識やスキルをかためなおすことである。

いまに始まったことではないが大学新生の学力低下も問題とされるなか、大学の大量化により大学におけるリメディアル教育の必要性は高まっている。当然のことだが、補習をするのであれば早い段階で（すなわち初年次の段階で）おこなわねばならない。それゆ

え、リメディアル教育は初年次教育とも密接な関係にあるのだ。

「初年次教育とは似て非なるもの」として、初年次教育とリメディアル教育とは明確に分けて考えるべきだとの指摘もあり、リメディアル教育は「基礎学力」を補う教育であるという意味では一理ある。ただし、じっさいにおこなわれている初年次教育のなかには、リメディアル教育の要素が混在しており、そのことは現場の教員の実感として否定できない。また、初年次教育も本来の大学教育には必要なかったもの（すなわち、基礎学力以外の、大学入学以前に身につけているべきことを補うもの）であるとすれば、初年次教育もまた広い意味での「リメディアル」だと考えることもできるのではないだろうか。

このような事情により、ともすれば初年次教育には負のイメージがつきまとうのであるが、それにばかりとらわれていたのでは初年次教育の未来は語れない。事情はどうであれ、大学教育本来の目的から外れたところで「しかたなくやっている教育」に発展的な未来があろうはずはない。

大学教育改革の一環としての初年次教育

大学もまた一つの経営体である以上、一定数の入学者を確保しなければならない。そうなれば、広い意味でのリメディアル教育の必要な学生が増える可能性も高くなるだろう。その事実は事実として否定するつもりはない。むしろ、その事実から目をそらしてはならないだろう。

ただし、そうであるから「しかたなくやっている教育」が初年次教育なのだろうか。リメディアル教育の問題は初年次教育の内容を考える際にもういちど取りあげることにするが、初年次教育はほんとうに「本来ならば大学教育に必要ななかった教育」なのだろうか。個々の教育内容については精査しなければならないことがあるとしても、むしろ、初年次教育は過去の大学教育には欠けていた教育、あるいは現在の大学教育に積極的に導入すべき教育ではないのか。

そもそも「本来ならば」という視点が曲者なのであり、その「本来の大学の姿」そのものを見直さなければならない時期にあるのだ。

日本における初年次教育の模索は、1990年代半ばから実質化したといわれる「大学教育改革」の一部であったことを確認しておきたい。大学教育改革の全体像について詳述する紙幅の余裕はないが、「大学の教育力」全体が疑問視されるなかで、その改革のキーワードの一つとして初年次教育は論じられてきたはずである。

大学の教育改革は現在もなお強く求められているが、その背景には、グローバル化、少

子高齢化、高度情報化がますます進む大きな社会の変化がある。そのような「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」が社会に求められているというのである（文部科学省・中央教育審議会大学分科会大学教育部会、2012）。

もちろん、この要求にこたえることは簡単なことではなく、いくつか疑問をさしはさむ余地もあろうが、すくなくとも、大学教育はどうあるべきか、それが問いなおされている時代にあることは事実である。その事実を正面から受けとめ改革を進めようとするとき、初年次教育の導入は積極的な意味をもつことになり、かりに、その具現化においては多くの困難を乗り越えなければならないとしても、未来を語りつづけられる教育となるはずだ。

桜美林大学の初年次教育のフィールド

初年次教育の具体的な内容は、どのようなものなのか。まずは一般的に、広く「初年次教育」としてとらえられているもの、実施されているものを概観しておこう。国立教育政策研究所・高等教育研究部の川島啓二は、初年次教育の領域を下記【A】のように分類している。また、河合塾は2009年度に「大学の初年次教育調査」を実施するにあたり、下記【B】のような、「初年次教育の8つの目的」を定義した。分類の視点がことなっているため両者には重なりあう部分もあれば、そうではない部分もある。それはともかくとして、両者をあわせて見れば、現在、各大学で展開されている初年次教育のフィールドをほぼ一望できる。初年次教育の取り組みがいかに多岐にわたっているか、それもわかるだろう。

【A】川島による初年次教育の8つの領域（川島、2008）

- ①スタディ・スキル系（レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等）。
- ②スチューデント・スキル系（学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等）。
- ③オリエンテーションやガイダンス（フレッシュマンセミナー、履修案内、大学での学び等）。
- ④専門教育への導入（初歩の化学、法学入門、物理学通論、専門の基礎演習等）。
- ⑤教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの。
- ⑥情報リテラシー（コンピュタリテラシー、情報処理等）。
- ⑦自校教育（自大学の歴史や沿革、社会的役割、著名な卒業生の業績など）。
- ⑧キャリアデザイン（将来の職業生活や進路選択への動機づけ、自己分析等）。

【B】河合塾による初年次教育の8つの目的（河合塾、2010）

- ① 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる。
- ② 高校までの不足分を補習する。
- ③ 大学という場を理解する。
- ④ 人としての守るべき規範を理解させる。
- ⑤ 大学の中に人間関係を構築する。
- ⑥ レポートの書き方、文献探索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルを獲得する。
- ⑦ クリティカルシンキング、コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身につける。
- ⑧ 高校までの受動的な学習態度から、能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を図る。

次に、桜美林大学全体の初年次教育のフィールドはどのような状態にあるか、それを概観してみよう。表1は【A】と【B】を参考にして桜美林大学の初年次教育に関わる広義の教育活動を分類したものである。分類や例示に不備もあろうが、桜美林大学における初年次教育に関わる広義の教育活動のフィールドをおおまかに見わたすかぎり、一般的に展開されている初年次教育のフィールドすべてをカバーしているといえるだろう。

表1：桜美林大学の初年次教育のフィールド

領域・目的	具体的な科目や支援システムの例
◇学生生活に関わるもの ※ 自己管理能力、時間管理能力の獲得。 ※ 大学という場の理解。 ※ 大学における人間関係の構築。 ※ 心身の健康支援、経済的支援。	【科目】 大学での学びと経験 LA セミナー（LA 学群の初年次ゼミ） 社会人基礎（BM 学群の初年次ゼミ） 【支援活動・支援システム】 アドバイザーシステム 健康相談、学生相談 生活指導、奨学金システム 学生サポーターによる各種支援活動
◇学習に関わるもの ※ 建学の精神、キリスト教主義に学ぶ。 ※ 自立的、自律的な学習態度への転換。 ※ レポートの書きかた、文献検索方法、クリティカルシンキングなど、大学で学ぶ方法を身につける。 ※ 専門学習につながる基礎を学ぶ。 ※ 実社会や外国で学び、視野を広げる。 ※ 高校までの知識の不足を補う。	【科目】 コア科目（全学必修科目） キリスト教入門、口語表現、文章表現、 コンピュータリテラシー、英語コア、日 本語専門基礎（留学生、日本語を母語と しない学生が対象） 大学での学びと経験 地域社会参加などのフィールド教育科目 サービスラーニングを導入した各種科目 LA セミナー、社会人基礎

	学問基礎、各学群の基礎科目や導入科目 GOプログラム (LA 学群の留学システム) 【支援活動・支援システム】 アドバイザーシステム 履修ガイダンス、オリエンテーション 図書館ガイダンス 各種の留学プログラム さくドリル (eラーニングの補習教材)
◇就職に関わるもの ※ 就職を視野に入れた学生生活、大学での学習を考える。 ※ 自己分析、進路選択への動機づけ。 ※ 社会人となる心構え。社会人としての基本的な姿勢、マナーなどを知る。	【科目】 自己実現とキャリアデザイン キャリアデザイン (三年次科目) 【支援活動・支援システム】 キャリアアドバイザーシステム インターンシップや各種講習会の実施

桜美林大学の初年次教育の未来を考えるために

前節で見たとおり、桜美林大学では初年次教育の目的に適う多彩な教育活動がおこなわれていることは間違いない。その状況をひとまずはよしとしたうえで未来を考えるとすれば、なにが課題となるであろうか。

一般的な初年次教育のフィールドのほぼ全域をカバーする多様な取り組みが存在することを考えると、今後の課題を大きくとらえるならば、「教育内容の再点検」と「教育活動の整理と再構築」ということになるだろうか。もちろん、すでにそのような試みもおこなわれているが (たとえば、特集記事のなかで紹介されている基盤教育院のワークショップ型FD)、さらに全学的な視野で、桜美林大学の初年次教育の「再点検と再構築」を進める時期にあるといえるだろう。

基盤教育院が成立するにあたっての重要な使命は「学びの基盤をつくること」であった。これは、先にも触れた「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」という社会の要求にこたえることに直接的に繋がる使命でもある。

ただし、社会が求めているのは大学全体の教育改革であり、初年次教育はその一環として重要な意味をもつ教育であったことを思いだしておきたい。桜美林大学の初年次教育との関わりが深い基盤教育院がその教育内容の「再点検と再構築」を進めるにあたって、当然のことではあるが、大学全体の教育改革を視野に入れた作業が必要である。その作業のなかで、桜美林大学における、あるいは桜美林大学の初年次教育における基盤教育院の使命と役割もまた再点検され、あらためて定義されることになるだろう。

現段階ではあくまでも私見にすぎないが、以下、思いつくままに、桜美林大学の初年次

教育を再点検、再構築にするにあたって具体的に留意したい点をいくつか挙げてみる。

①桜美林大学の教育、そのなかでの初年次教育を再定義する

大学の教育改革の一環として初年次教育があるのだとすれば、当然のことながら、大学全体としての改革方針も再確認されなければならない。そのような話になると、どうしても抽象的な理念が語られがちであるが、できるだけ、より具体的な基本計画が語られるとよいだろう。部署ごとの個別の取り組みについて中期目標、長期目標を示して点検する仕組みはできているが、たとえば、桜美林大学の初年次教育全体をどう発展させるか、といった枠組みでの見直し計画を立てることはこれからの課題ではないだろうか。もちろん、その立案には基盤教育院も大きな責任を負っているが、全学的な議論が必要だろう。

②縦と横の連携システムを構築する

桜美林大学では多様な初年次教育に関わる取り組みがなされているが、それぞれが個別に機能している感があることは否めない。2007年度に基盤教育院が成立してからは、少なくともその内部においては、それぞれの教育活動に携わる教職員がおたがいの活動内容や課題を共有し、議論する場が設けられてきた。先にも述べたように、「基盤教育院のワークショップ型FD」の取り組みはそのよい例であるし、健康管理センター、学生支援課、アドバイザーと連携した学生対応も、幾度となく試みられている。

ただし、そのような取り組みについてもさらなる発展が期待できるであろうし、たとえば、「LAセミナー」「社会人基礎」といった各学群の初年次ゼミに関する情報共有、連携は必ずしも充分であるとはいえないだろう。また、就職を視野に入れた初年次教育をおこなうのであれば、キャリア開発センターやキャリアアドバイザーシステムとの連動、連携方法を再点検することも必要だろう。このような縦の連動と連携は、初年次教育とその後の専門教育との間でも、もちろん重要である。

初年次教育のフィールドを見わたせばわかる通り、初年次教育の目的は、一つの科目や一つのシステムだけで、あるいは、現在の基盤教育院の取り組みのなかだけで達成できるものではない。たとえば、初年次教育の目的ごとに一つの科目をおくこともあるし、いくつかの目的を一つの科目に組みこんでそれを達成する方法もある。いくつかの科目を通して一つの目的を達成する方法もあるだろう。また、初年次教育は科目においてのみ具現化されるわけではない。オリエンテーション、図書館利用ガイダンス、学生生活相談などの広義の教育活動、学生支援システムを通して実現される初年次教育もある。初年次教育のフィールドは広く展開すればするほど、複数の教育活動や学生支援システムにおいて、さまざまなかたちで具現化されることが多くなり、それらの連動と連携、統括と制御が重要

になってくる。全学的な連動と連携のシステムがあってこそ、よりよい効果、成果を期待できるのである。

また、初年次教育の成果をはかるためにも、連動と連携のシステムは重要な役割を果たすことになるのではないだろうか。成果をはかることは、初年次教育の再点検と再構築をはかるうえでも重要なことであるが、個別には、なかなか客観的に成果を判定しにくい科目や取り組みもある。また、たとえば、ある初年次教育を終えた段階では必ずしも具体的な成果が出るわけではないが、専門教育に進んだ段階で初めてその成果が明確化することもあるだろう。「学びの基盤」の成果は、その先の学びのなかで初めて明らかになることもあるはずだ。

③「広義のリメディアル」の問題

初年次教育を通して「学びの基盤」をつくるとして、かりに、その「学びの基盤」の前提たる「基盤」が学生になかったとしたら、どうだろうか。リメディアル教育の本来の意味である「基礎学力の補習、補完」も問題であるが、先に述べた「広義のリメディアル」は、初年次教育にとって深刻な問題となりうる。

たとえば、河合塾が調査の際に初年次教育の目的の一つとして定義づけた「受動的な学習態度から自律的・自立的な学習態度への転換」である。じつは、河合塾の「大学の初年次教育調査」では、8つの目的すべてについて直接的に調査をおこなったわけではない。多岐にわたる初年次教育に共通する目標は「受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的態度への転換（「8つの目的」でいえば①と⑧）」であると考え、それを促す「科目」としての「初年次ゼミ」に注目し、そこででなにおこなわれているか、どのような成果が上がっているか、それを明らかにしようとしたのである。

そのことからわかる通り、「自律的・自立的な学習態度への転換」は大学教育において重要なことであり、まさに、社会が求める「生涯学び続け主体的に考えられる力」の基盤である。当然、それを大学で身につけさせなければならない。ただし、それは「大学生として身につけるべき自律的・自立的な学習態度」である。つまり、小学生には小学生なりに、中学生には中学生なりに、高校生には高校生なりに、それぞれの段階で身につけるべき「自律的・自立的な学習態度」があるはずなのである。その段階を踏んできた大学生に、さらに「大学生としての自律的・自立的態度」を求めるのと、その段階をきちんと踏まずにきた大学生にそうするのでは、初年次教育の意味や内容は大きく違ってくる。もっといえば、かりに、受動的学習態度さえもたない大学一年生が現れたら、どうしたものか。

基礎学力に関する本来のリメディアル教育の問題も含めて、大学としては入試システムを再検討する必要もあるだろう。2006年にベネッセ教育研究開発センターが実施した

「第4回学習基本調査・国内調査・高校生版」によれば、偏差値を基準とした中間層（偏差値50～55のボリュームゾーン）の学校以外での学習時間が1990年の調査結果と比較して半減している。その一因は大学入試が容易になったことにあり、その恩恵をいちばん受けたのがこの偏差値中間層だからだという（ベネッセ教育研究開発センター、2006）。

「段階を踏んでいない」という問題は「自律的・自立的学習態度への転換」以外にもあてはまる。たとえば、「時間の管理」「ノートのとりかた」「友達づくりも含めた人間関係の構築のしかた」「コミュニケーション力」「将来の職業への動機づけ」など、初年次教育の領域や目的とされることのほぼすべてにおいて、「あまりに段階を踏んでいない」と判断される学生が増えているのではないか。だからこそ、初年次教育において、そうした領域や目的が挙げられるのだ。

「大学でこんなことまで教えなければならないのか」と愚痴を言って、高校までの教育に責任をおしつけるつもりは毛頭ない。ただし、どこまでも「段階」をさかのぼった教育を実施することは物理的に不可能である。また、一定の段階からその先を目指さなければ、四年間で「社会が要求する学士力」にまで到達することはできないだろう。

社会や時代の変化とともに大学生像が変化していることはたしかであり、それに応じて大学教育も変わらなければならない。大学教育、とくに初年次教育において、この問題にどのような対応策を見いだすか、そこは考えなければならない。ただし、その一方で、大学生の変化をこのままにしておいてよいはずはない。小学校から大学まで（あるいは大学院まで）の学校教育全体を、そして、地域社会や家庭における教育をみなおすことも必要ではないだろうか。大学の教育改革だけで対応できる問題ではないと考える。

さいごに

2000年代後半からとくに急速に拡大してきた他大学の初年次教育についてもいえることであろうが、桜美林大学の初年次教育もまた、多様なニーズに個別に対応するだけでなく、全学のカリキュラムともたしかに連動する総合的な初年次教育プログラムとして、統合、再編成されるべき時期にきている。激しく変化する時代にあっては、柔軟にその変化に対応することも大切であろうが、個々の取り組みがバラバラに変化していったのでは、大学全体としての教育が機能しなくなる危険性がある。また、初年次教育は多様化に混沌としたまま未来を見失うことになるだろう。

そのように考えると、「縦と横の連携システムの構築」が、一つの大きな鍵となるのではないだろうか。もちろん、個々の科目や取り組みの見直しも必要だろうが、その際には

全学的な視野で再検討することが肝要であり、そのためには全学的な問題意識の共有を可能とするシステムの構築が不可欠であろう。

もちろん、現在もそうしたシステムがまったく存在していないわけではないが、改善の余地は大いにあると思われるし、それを磨きあげることが、初年次教育のよりよき未来、ひいては大学教育改革のよりよき未来を切り開くことになるのではないだろうか。

基盤教育院の使命は、初年次教育も含め、実際の科目や取り組みを通して「学びの基盤」をつくることであることに変わりはない。ただし、そのためにこそ、桜美林大学全体としての総合的な初年次教育プログラムの構築を目指し、縦と横の連携システムづくりの核となることもまた、基盤教育院の重要なタスクの一つではないだろうか。

文献一覧（編著者五十音順）

河合塾編著（2010）『初年次教育でなぜ学生が成長するのか 全国大学調査からみえてきこと』東信堂

川島啓二（2008）「初年次教育の諸領域とその広がり」『初年次教育学会誌』第1巻・第1号

濱名篤・川嶋太津夫編著（2006）『初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向』丸善

ベネッセ教育研究開発センター（2006）「第4回学習基本調査・国内調査・高校生版」

ウェブサイト閲覧（2012年12月27日）http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/hon/index_kou.html

文部科学省・中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2012）「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）ウェブサイト閲覧（2012年12月27日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm

山田礼子（2005）『一年次（導入）教育の日米比較』東信堂

山田礼子（2012）『学士課程教育の質的保証に向けて 学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂